

問題提起「コミュニケーション分析の観点から」

山 地 弘 起（メディア教育開発センター・助教授）

山地です。よろしくお願いいたします。

僕自身は大学時代は国際政治をやっておりまして、その後は教育心理学に移りました。僕自身がなかなかやる気のない人間ですので、モチベーションという分野を専攻しまして、やる気とか無気力とかのメカニズムをずっとやって参りました。特に大学時代は出席をとるという授業が駒場時代にたくさんありまして、「出席をとる」と言われた途端にイヤな気分になりまして、ボイコットしたり、20コマくらい登録して、週1コマ体育だけ出るという、そういう学生でしたので、なかなか教えることに不向きなもので、コミュニケーションという問題提起のタイトルを与えられたとき、非常に困りました。私が現在授業の中から、関連することを少し整理しまして、それを問題提起としたいと思います。

ちょっとお聞きしたいんですけど、何人かの方に。

山地：「どうですかね。コミュニケーションというとやっぱり……。先生でいらっしゃるんですか」

女性A：「一応」

山地：「失礼ですが、何を教えていらっしゃるんですか」

女性A：「生物学を」

山地：「学生とのコミュニケーションというのはどのようにされていますか」

女性A：「一応基本的には講義形態なんですけれど、授業が終わったら質問を歓迎していますので、時には何人か」

山地：「授業が終わって、学生がわからないところを聞きにくる、という形ですね」

山地：「どうですか？ コミュニケーションは、どんなふうにとっていらっしゃいますか」

女性B：「私は語学ですので、いつも学生に、いわゆるこちらから質問をしたり」

山地：「授業中に？」

女性B：「はい、そんなことです」

山地：「はい、ありがとうございます」

僕はコミュニケーションというのは、基本的には言葉をとおしたやりとりというイメージが非常に強いというふうには、もちろんそれは日常的にはそういう意味で使われてますし、僕自身もそういうふうによく思うんですけども、ただ授業ということになりますと、ここで皆さんもうすでに稲垣先生がお立ちになり、米谷先生がお立ちになり、いま僕が立っているわけですけども、たぶん空気というか、それぞれの醸し出す臭いというか、何かいろいろな雰囲気があると思うんですね。皆さん自身もいろいろな顔をしていらっしゃるんで、前から僕が見ていると、近付きたくないという先生もおられれば、何か素敵だなという方がおられたら、思わず身を乗り出したりということがあります。授業でもそうですよね。よくうなずいてくれる学生には、何となく目を向けて相づちを求めてしまったりとか、あるいは逆に、非常に反応の悪い学生に対しては、何とか気を向けてやろうと一所懸命働きかけたりして、寝てしまおうとがっかりしたりするんですけども、そういうような場で起こっていること、有機化といいますか、オーガナイズされた場の成り立ちというか、そこまで深めてコミュニケーションということを扱っていきたいと思うんです。

そうしますとキーワードは次のようになります。少しなじみにくい言葉が多いですけども。

1 番目は無自覚の抑圧、犠牲の構造、と少しやっかいな言葉ですけども。実はフレイレという人がかつて被抑圧者の教育学という本を書きまして。ご存知の方はどれくらいおられますかね、フレイレという名前をご存知の方いらっしゃいますか、稲垣先生はもちろんご存知だと思いますけれど。実はそれは20年以上前に書かれた本なんですけれど

も、最近改めて授業とか、FDの問題を考えると、ひとつの大きなとっかかりになるというふうに思い始めました。そういうことで、抑圧と犠牲の構造ということが、ひとつのキーワードとして僕の中には強くあるんですね。

それから二つ目は、それを生み出すものとしてという、間に言葉が入りますけれど、学校文法、学校の中でしていること、していけないこと。学校の中での言葉のやりとりのルール。このへんになりますと、大山先生の相互行為分析ともかなり関わってきますけれども、そういうことが背景に沈んでいる。つまり、いつも地の部分として、我々の通常の言葉のやりとりとして行っている図の部分に対する地の部分として、そういうことがいつもあるだろうと思います。

それから三つ目は学習観。我々が学習を何と考えているかということが、決定的に授業のデザインの仕方とか、関わり方を決めていきます。

そして最後に共同創造。一体我々はいくら変えられるだろうか。変わっていくつもりがあるのだろうか。そういうことなんです。

そこでまず、抑圧者・犠牲者次元というもののなんですが、実は教員というのは非常に権力を持っている。その代表が評価権でありまして、我々が学生の成績をつけるわけです。我々非常に昔は、レポートをとばして、飛距離でもってAにしたりBにしたりという冗談めいた本当の話を聞きましたけれども、評価の権利を教員が独占しているというのが、通常であります。これは決定的に重要な違いでありまして、いかに学生と共同しようとか、学生が主体的に参画する授業といっても、最終的な評価権を教員の側が握っている限りは、共同はあり得ないんですね。それから二つ目は、これは最近非常に失墜したと言われる知的権威であります。学生が教員を教員として認知するのは、教員がそのフィールドにおいて自分よりかなり先に行っているという、そういう recognition があるから、教員というふうに認知するわけですね。もしその背景がなければ、我々は普通のおじさん、おばさんであります。ですから、評価権を握っているということ。それから、知的権威を学生の側から認知されている。この二つが、つまり権力を、権力と言いますか、権威を持っているということの実際の内容ということになります。

ところが実は、教員というのは犠牲者でもある。それは特に最近のFDがそうです。ファカルティディベロップメントという、我々はディベロップされなければいけないわけで、つまり、ジョブ・ディスクリプション、通常我々は研究業績で評価されまして、研究業績でもって人事を決められ、そして教育をするというのは、本来の本務というよりは、むしろこれはやらなければいけないこととか、義務的な、副次的なとか、そういうような仕事としてこれまで理解されてきているので、最近役割葛藤が非常に強い。こんなに教育に力を入れてしまうと、研究ができないという声も多いわけです。

あるいはうちのセンター、マルチメディアの、高等教育への応用をむしろ促進するような働きをしているメディア教育開発センターというところなんですけれども、そうすると、情報機器の使い方とか、あるいはコンピュータリテラシーがない教員にとっては、これはものすごく大きなプレッシャーになっていて、早く定年したいとか、早く退官したいとか、そういう声をちらほら聞いたりします。そういう非常に、なぜこんなふうに変わらなければいけないのかという、その犠牲感を非常に持ちやすい状況があります。

それから、無意識の自己犠牲と書きましたが、特に看護とか、援助関係の、教育学部の先生にもそういう方が多いんですけれども、学生のために良かれと思って自分をかりたてて、非常にかりたててバーンアウトしていくという。自分が犠牲となって、英語で no pain, no gain という言葉がありますけれども、ある程度頑張って自分を犠牲にして、自分を傷つけながら頑張らなければ、物事が達成した感じがしないということで、とにかくやっていく。特に看護学校なんかで教えますと、患者さんのためというキーワードが非常に強いものですから、当然看護の先生たちの教授学習場面というのは、学生のためという、そういうふうな発想が非常に強いんですね。そうなりますと、看護のその先生の方が、自分を犠牲にしないということが完全に意識の外側におかれてしまう。自分が犠牲にならないということは、つまり自分のためにやっている、いわばわがままであるというふうに思ってしまうという、非常におかしなことになっていきます。

こういふように、教員というのは抑圧者としての側面と、それから犠牲者としての側面を二つながら持って、特にこの時期、FDとか、メディア化とか、情報化とか、そういったことが叫ばれている中で、非常にストレスが大きい仕事になってきている、ということが言えるわけです。

この背景にあるのが何か、というのが学校文法というものであります。いくつか見てみますと、これはひとつは、教授—学習文脈でのコミュニケーションの文化であるというふうに言えます。例えばここでのシンポジウムのやり方を見てみますと、どこでもそうなのですが、通常はオーディエンスの方が一斉にこちらを見ているわけです。こちらに何人か並んでいて、ある一定の時間、言葉を介して何かのメッセージを送るわけです。その最中に、例えばつまらなくなったから寝ちゃったとか、寝ちゃったというのは本当に床の上に横になってしまったとか、あるいはタバコをふかし始めるとか、最近厳しいですから特にそういうことができない傾向が大きいですが、あるいは即座に手を挙げて今のことについてすぐに質問をするとか、そういうことは、一般にはできないということで、了解されているルールとして機能してますよね。これはひとつのカルチャーだと。これが、家族も含め、小、中、高と、いわば教授—学習場面でのトレーニングをとおして、非常に深く内面化されている。逆に言いますと、大学生は発言しないというけれども、高校までそういうカルチャーで育てられているんですから、発言してはいけないということになっているんです。それを初めてその学生が来たかのように受け取って、発言をしないあなたは勉強が足りないとか、考えてないとか、というのはとてもおかしい話だということになるわけです。

そして二つ目ですけれども、教授学習文脈のカルチャーの上に、大学には大学なりのいろいろなコミュニケーションの規範がありますので、それを伝達して強化する。例えば田中先生の授業ですと、最後にフィードバックの言葉を書いて、それに対して田中先生からコメントが返ってくる。そういうやりとりを通して、この授業ではそういうやりとりの機会が保証されていて、そういうふうになんかの自分の体験を言葉にしようという、ひとつの規範として機能していく。そういうことがあるわけですね。これもひとつの文法として、この授業、特殊ではあるけれども、作られているものです。そしてこれは意図的な伝達、これまで顕在カリキュラムと呼ばれてきたものですが、その地として機能しています。ですから、いかにヒューマニスティックな発想を述べたとしても、この関係がヒューマニステックなものとはほど遠い場合には、非常に大きなジレンマを学生に起こす。逆に言えば、高校までの中で、個性化とか創造性というものが非常に強調されていながら、これまでなかなか達成されたためしがないというのは、関係の中で個性化とか創造性というものはあまり重視されていなかったから、ということが言えます。つまり、教える内容としては、それは確かに伝達されているかもしれないが、関係の中でそれが表現しきれていないということなんですね。

そして最後に、こういった学校文法というのは特定の学習観、学習についての概念化、それから関係の構えです。我々一人一人が人と関係するときに持っている癖であったり、パターンであったり、それから学生に対するある見做し方であったり、そういう関係の構えが織りなしているものですから、我々がもしその関係を変えて、本当に授業を変えようということになれば、この非常に基本的なところを問われている。私と学生との関係の在り方を変えるという事が求められているというふうに考えています。

そこで学習観についてもう少し触れてみたいんですけども、一時期この学習観に凝りまして、いろいろな人に学習観を聞いていたんですが、大学生20人くらいにインタビューで聞いてみたときに、大きく三つの学習観が表れてきました。それを仮にですけれども、遂行志向、課題志向、過程志向というふうに名付けています。真ん中を少し見ていただきたいんですけども。

ひとつは収束的な学習です。これはスキルを「身に付ける」という、文字どおり付けて大きくしていくというものです。できなかったことが、できるようになる。漢字が覚えられる、九九ができるようになる、リコーダーが吹けるようになるというのと同じような発想で、語学でいえばボキャブラリーが増える、法律でいえば民法のこのへんまで学習が進んだとか、あるいは心理学でいえばこの領域まで学習が済んだとか、そういう極めてリニアなタイプの科目について見られるものですが、とにかく自分に対してインプットしていくということですね。その場合の体験は、非常に圧迫感が強い。要するに、テスト前の気分なんですよ。とにかく量を入れるということ。その場合に基本的に目指されているのは、達成であったり、承認であったりします。自分として自分を承認できるという、そういう自己承認も含めて外部からのひとつの評価を求めるために、自分に圧迫感を与えるという。

それに対して二つ目、課題志向というのは——これ、今思い出しましたけれど、さっき米谷先生がティーチングとラーニングと、コミュニケーション、だいたいそれに対応しているんだなと思うんですけども、二つ目の課題志向というのは、拡散的な学習ということで、入ってきた情報を自分のそれまでの経験や知識なんかとうまくすり合わせながら、どうもギャップがあるとか、わかりにくいとかそういったときに、それを土台にして次の情報を求める、

あるいは、それを自分で展開してみるという、そういうふうなプロセスです。不思議なことに、僕は教育心理学の出身ですけれども、学習心理学とか教育心理学の中では、あまりこの課題志向というのは表だっては研究テーマにはなっていないんですね。それは、いわば実験室の外にどうしても出てしまうといいますか、研究文脈をとにかく飛び越えてしまうものですから、非常に統制しにくいという問題がありましたために、よく教育心理学は実践では役に立たないと言われたひとつの大きな理由は、非常に客観的で、しかも統制された測定状況を求めるがために、それぞれの人が自分なりに外に飛び出ていく、そのところをできるだけ固めて逃さないようにしたという背景があります。

そして最後に、過程志向。今日は僕はこここのところが一番焦点を当てたいんですけども、米谷先生の言葉で言えばコミュニケーションということを紹介してですが、気づき学習とか、意識化の学習というふうに言えると思います。これは、有名なケーラーのチンパンジーの実験なんかにも見られるように、何か問題解決の時に試行錯誤とか、何か強化されて、ひとつひとつが出来るようになるということとは違って、ある瞬間にアッとわかる、「ああそういうことだったのか」ということがわかるという、そういうタイプの再構成。それはいわば、非常に自由を保障されている中でないと、なかなか成り立ちにくいわけですけども、そういう学習がひとつのタイプとして、やっぱり大学生の中でも共有されている。これはまだ確かめていないんですけども、実は体育系の、鹿屋体育大学の先生がいらしゃいますけれども、体育系の学生はこの過程志向の学習観というものを非常に強く持っているような気がいたします。

それからもうひとつは、さっき二つ目の学校文法を支える土台としてあげました関係の構えです。これには二つ考えられます。

ひとつは、生産モデルないし指導とこれまで呼ばれてきたものですが、現在の我々の姿、学生も含めて、それから自分自身も、これは変えるべきものである、自分がコントロールをして変えていかないといけないと、もっとよりよい姿があるわけだから、そこに向かって自分を変えていく。そして、学生に対する責任としては、今の学生というのは未熟であるから、それに対して何とか引っ張りあげようとする、そういう働きかけを生み出します。正解は常に外側にあるんだと。これはどのくらいマッチするかはわかりませんが、稲垣先生が最初にお話になった *authoritative truth* というものがあって、それを、何といいますか、追いかけていく作業というのに、かなり近いのではないかなと思うんですが。ですから教室の中で問題が起こった場合には、それは解決すべきものであると。発言しない学生は発言するべきであるし、それから私語をしている学生は私語をやめるべきであるし、授業中にタバコを吸うなんでもってのほかであるから、そういう学生は出て行きなさい、ということになるわけです。

それに対して展開モデル。これは「共同」というふうにラベルを貼ってもいいかなと思っているんですけども。先ほど述べたように、意見を言わないのは、小・中・高での積み上げの成果であると、もし考えるとすれば、今の学生の姿というのはひとつの必然の結果であると。ひとつのカルチャーの表現であるということになります。それと同様に、こちら側もカルチャーの表現でありますから、古いタイプの大学の授業法を受けたりとか、あるいは自分なりにいろいろなマスメディアの影響を受けているはずですけども、少なくともカルチャーとして、目の前にいる人と私は違うのであるというのが前提として必要ですね。そして「正解」はこうなると、伝えられるものでもなく、これはお互いに創造し合うしかないんだと。

こんなことは、実は小学校の先生たちにとっては、非常にある意味では当たり前でありまして、子どもたちと関わる中で、もともとこちら側にあるものをインプットするというような教授法は、かなり前にもう反省されている。そこにある姿は、例えばオープンスクールとか、あるいは総合学習に見られるような、むしろ学習者の生活の方にこちらから歩み寄るというようなこととなって、そこでいっしょに創造過程に入っていくということになります。ですから何か学生が問題を起こしたような場合には、これは、要するに関係の中でのひとつのメッセージであると。あなたの授業は私にとってはこんな意味があるとか、あるいは、今のこういう情報については私はとても受け容れきれないとかという、ひとつのメッセージであるということで、それを含み込んでむしろシステムを進化させるという方向に行かないと、問題として切り離していくという方向に行くと、結局こちら側の、つまり教員側の文化を守るということに汲々となってしまふ、ということになります。

ですから、そういう二つの学生との関わり方の構えがある、というふうには押さえていたいと思うんですね。そういうふうには押さえますと、先ほど言いましたように、まず教員の側が抑圧者として、ないし犠牲者として非常にストレスをあびている。学生の側はこれまで培った、ある意味では成功裡に習得した学校文法のために自由な学習ができにくくな

ている。そのお互いが解放されていくためにはどうしたらいいのだろうかということで、これはもう、共同戦線を張ったほうがいいのではないか。実は学生を我々が評価するとか、あるいは我々が自分で努力をして自分だけを変えていくとか、それはあまりにも苦しすぎるわけで、しかも非常に現実とは離れたことです。

お互いがお互いの力を利用してというか、助け合ってお互いに解放されていくことはできないだろうかということで、ひとつのポイントとなりますのは、ボトムアップの関係創造だと。つまりこんな教授法があるとか、あるいはいくつかの大学では非常に先進的なFDの試みがありますけれども、それを応用してきて持ち込んで、それを使ってみましょうということでは、どうもやっぱり苦しいんじゃないかなと。自分にとって必然性がなければならないほど、それはやっぱり苦しい。今たまたまここにいる人たちと、今のこのやり方でいいかなとか、わかりやすいのかなとか、何かそこの人寝ているけれども、先ほどもありましたけれども一昨日寝過ぎたの？とか、何らかのお互いの、今、自分のニーズに即した状況が起こっているかどうかという確認が行われていないと、先に行けないだろうと。ですからその場合は、先ほど米谷先生がおっしゃった、いわば客観的に記述していく言語に対して、生成言語、つまり、今自分はどのような状況であるかということを送達していく努力が必要だと思うんです。ですから、ここでは、二つの代表的なというか、実践者と研究者というのがあるんですけども、その実践と研究者のそれぞれの特徴がかなり出てきていると思うんですね。観察者の立場からいけば何が起きているかということ、第三者的に記述するということが大事ですけども、実践者としては生成言語のレベルで、今ここにある空間はこんなふうに感じられるけれども、学生の側は本当はどんなふうに感じているんだろうとか、今日はこんな話をしたいけれども、みんなの様子を見るとこの話はしたくなくなったけれども、というような感じで、その場で起こってくることをそのまま表明してお互いにやりとりをしていくという、そういうことができないだろうか。ですから、ここでは一般解はないと。特殊解ではないといけないんじゃないかと思うわけです。

それから二つ目は、特に学生と接してまして思いますのは、自分自身につながった課題でなければなかなか動けない。つまりこのカリキュラムの上で、この授業ではこういう内容をやらなければいけないということで自分に課していくというようなことをやっていきますと、これは京都大学の学生は特別なんだと思うんですけども、ぱっと資料を読み込んで書いていくなんていうことは、なかなかできない。逆に言うと、本当に投げ出して、こちらがいうことをすべてノートする。冗談までノートしてしまう。あるいは逆に、まったく無視をするという。どちらかに極端に行きがちだと思うんですね。自分自身につながってくると、例えば後でひとつ実践例をご紹介したいと思うんですけども、自分の学校時代のいろいろな学校文法、やっていいこと、やっていけないことを思い出す過程で、あれはなんであんなことがあったのかな、とか、あるいは自分自身の家族との関係の中で自分はなぜああいうことをしたのかな、とか、自分自身に直結したようなことが課題としてあがってきますと、すごくモチベートされていきます。

そして三つ目は、それぞれが犠牲にならないということ。これは非常に悲惨な話ですけども、愛知県のある小学校に、稲垣先生がよくご存知の学校ですけども、学生時代によく通いました。そこで、教務主任の先生とお話をしたときに、「私たちはよく考える」と言うんですね。いったいこれは、もう先生が死ぬか、子どもが死ぬか。これまでの教育は子どもを殺してきてしまったと。今この過渡期は、先生がいったん自分を殺す覚悟でやっているんだということを聞いたときに、これはちょっと違うなと思ったんですね。しかも、その公開研のときに、ある別の学校の先生が手を挙げまして、「私には家族もあり、そして子どももいるし、自分がみなければいけない親もいると。学校だけで死ぬわけにいかないんです」ということを言われたときに、これはやっぱり違う。つまりどちらかが片方のために自分を犠牲にしていくという構造は、やはり破綻すると。ですから、学習者も教員もどちらも犠牲にならないように、自分にとってのニーズをコミュニケーションして、今自分に必要なことはこういうことですよということを、自分の中でも整理して伝えられるような、そういうような授業環境を作れないだろうかと思うわけです。

そのために、コミュニケーションのチャンネルというものは、やはり確保しておかないといけない。これはものすごく大きな問題だと僕は思っているんですが、一週間に一回90分なりなんなりの授業で、その授業が終わったとたんにそのテーマが終わり、いろいろなものが1日に入っていて、その一週間たったところでまたその先生と会って何かをやるということは、非常に工場生産のモデルに近いんですね。何か非常に効率的にぼんぼん入れておいて、全体の何時間でもって履修したとみなすわけですから、それはおかしいだろうと。コミュニケーション・チャンネルを確保しておかないと、「これは本当はやりたくないんです、先生」ということも自分が思ったときに言えないし、それ

からこんなことをやって欲しいということも、なかなか伝えられない。こちらから言えば、君がそんなことを言っても、こちらには力量不足でそんなことはできないと。この先生のところに行きなさい、ということも言えない。というわけですから、チャンネルを何とか確保しなければと思っています。

そういうことを考えて、ひとつの実践をやってきました。これは半期の授業で、僕はもともと教育心理学でして、通常は統計学とか、心理学とかを教えています。このときには、教育評価特講という、たまたまゼミ風のものがありましたので、五年計画でいろいろとやってみてゐるんですが、これは四年目の実践例です。

一年目は「了解」という言葉がなじまなくて、学生は二人しか集まらず、二人でわかりに来てもらってというか。S大学というのは首都圏のある国立の大学ですが、来てもらったりしてました。意見を聞いたりしました。二年目は、統計学と了解を半々。

三年目は、少し違うやり方をしまして、これは四年目の実践なんですけれども、内容の柱は先ほど申しました学校文法。教室文法とここでは言い換えているんですけれども。それから、ライフストーリー。つまり学校教育の中で受けてきた自分の生活史の中で印象に残っているものとか、まだ引っかかっているもの等を言葉にしていく作業です。これはいわば、体験を外化するというのを通して、もう一回自分で吟味するというか、制度化されたものをいったん客観化するという作業です。それから身体から見た教育。ここでいきなり身体が出てきますのは、皆さまのお手元の資料としていってるかと思えますけれども、僕自身はこのコミュニケーションの基底には、非常に身体関係が強く横たわっていて、エンタテインメントというような表現をそこでは使っていますけれども、お互いに成りこんだり、あるいは流れ込んだりしているところが非常に強いですから、そのところを意識化していく作業。それから身体風景というのは、自分の中の身体風景でもあるし、他者から見た身体の様子でもあるし、それを何らかの形で表現していく。最後にTATという心理検査をするんですが、これはおいておきまして。

こういうように基本的には、いくつかのテーマを決めて、その実習と振り返りの作業を基本にします。その背景にいくつか、資料を読み込むというものを要求するんですが。ですからほとんど学生は毎週レポートを出さないといけない。方法の特徴としては、これは最初に断っておりまして、「テキストはあなた自身である」と。私自身であるし、学生それぞれ自身がテキストだと。テキストというのは自分の外にあって、整理してもらって、それを自分の中に突っ込むことではなく、あなた自身の中から読み込むことである、というふうに言うておりますので、授業時間は実習中心にして、あとは電子会議室でWebの上に僕の資料を載せてますので、必要があればそれを読み込み、そのボードの上に自分の意見を書き込んでいくということをします。これは、こういうものなんですけれども（提示）、「ご意見版」というふうにしておきまして、例えばこれはオオタイホミさんという方からきているんですが、青のところは彼女が書いたものです。それに対してこちらからフィードバックをしているわけです。フィードバックというか、これはもうお互いの話し合いという感じです。もともと僕も田中先生のやり方に倣って、フィードバックシートというものを用意して、それぞれ返していたんですけれども、どうもそうなるとアトム化するというんですか、みんなダイナミックにディスカッションが深まるとか、ディスコースがひとつ成り立っていくという感覚が非常に薄かったものですから、こういうふうにしますと、それぞれのレポートが誰でも読める。しかも、外部の人もいきなり入ってこれたりしますので、それはそれでとても面白いんです。お互いが他の人のレポートを読むことで、逆にそれに刺激される。マイナス面としては、他の人のレポートをコピーして自分のに貼り付けるなんていう、そういうけしからんのもおきまして、まだそういう、あからさまにそういうのは出てきていないんですけれども、そういう臭いがするところはあります……。もっとも教室の中でもディスカッションをしますので、それはそこで埋め合わせができています。

こういうようなことを通して、ひとつのディスコースのコミュニティを作れないかなと。それで結果として、まだ今回のものについては、どういう結果が出ているかということは、僕はフォーマルには整理していないんですけれども、学生は非常に混乱をします。つまり、これまであたりまえというふうに思っていた授業のやり方とか、それから、例えば体育館で座るときの座り方とか、そういった、あるいは、ここでは教壇があって、こういうものがあるって、僕はこれがいやでいつもどけてしまうのですが、そういうひとつの文脈というか、そのカルチャーの中に自分が知らず知らずの間に入っている。ちょうど日本語を話すのと同じように、非常に自然にその中に入っている。将来教職に就く人たちなので、非常に混乱をします。これまでいいと思ってやってきたはずのことが、非常に自分を苦しめている

ということ、だんだん揺さぶられていきますので、非常に混乱する。混乱することができれば、僕自身はひとつの成果だというふうに思っていますので、今度そこから先は、たぶんこの電子会議室とか、それからプライベートに僕に意見を言いたい人はEメールで送ってくるようにしてますので、これは1対1で、そこで補いをしていくというようにしています。

以上、もうたぶん時間になってますので、このへんで終わりたいと思いますが、もし何かコメントがあれば、また後でよろしくお願いします。